

令和3年5月

藤代歴史愛好会 石山博

日本古代史の謎（天皇前史について）

1. メソポタミアって・・・何？

突然ですが、世界4大文明をご存知ですか。

中国 インダス エジプトは

国の名前でよく聞きますがソポタミアって
どんな意味があるのでしょうか。

実は、「中国」という意味があります。



4大文明は、それぞれ川の名前とセットで、

中国文明は、黄河

インダス文明は、インダス川

エジプト文明は、ナイル川

メソポタミア文明は、チグリス・ユーフラテス川

なんだか長い名前ですね。それは、2つの川の名前だからです。

メソポタミアとは、現地の言葉で、「大きな川にはさまれた真ん中の土地」という意味だそうです。つまり・・・「中国ちゅうごく」ということです。



実は、隣の国の中国も、元は「黄河と長江にはさまれた真ん中の地」という事だった。
ということだそうです。共通しています。

大きな川にはさまれた
真ん中の土地？



そう言えば、日本にも中国というところがあります。

それは、中国地方です。

しかし 大きな川にはさまれた真ん中の土地には見えません。
なぜ日本の中国地方は、中国なののでしょうか？

2. なぜ日本にも中国があるのでしょうか。

大きな川と川にはさまれていないのになぜ中国というのでしょうか。

そのヒントは、近畿地方にあります。

その意味は、 近→近い 畿→お城

「王様のいるところ」・・・だからです。



むかしは、奈良・京都からみて遠い国なので、

九州のことを「遠国おんごく」と読んでいました。

それで、近くの国と遠い国の間なので、

中国と呼ばれるようになったといわれています。

ここで、疑問が出てきます、「遠い国は近畿から見て西にしかないのか」ということです。
例えば、東の方向 関東地方を「遠国」、東海地方を「中国」と
呼ぶことだって考えられたはずです。

この疑問を解決する仮設は、

仮設その1・・・当時近畿地方は、国の東の端にあった。



つまり 今の鈴鹿山脈が国境であり

そこから 東は、外国だった。

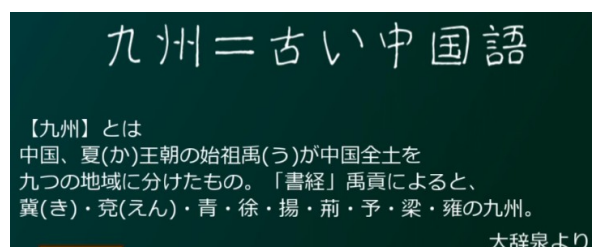
と考えると「遠国おんごく」は西にしか
なかった事になります。

3. 九州の意味とは・・・

実は、九州は、古い中国語なんです。

その意味は、「王が九つの地域に分けて
支配した事に由来する。」

ということなのです。



仮設その2・・・そうすると 九州には、その昔 王国 があった？。

そうなると、近畿は「王様のいるところ」なので、

九州にも「王国」があったと考えると。

王国と王国にはさまれた真ん中の土地なので、「中
国」地方と呼ばれるようになったと考えられます。



日本に、2つの王国があったと考えると

思いつくことがあります。

むかし日本は、「倭国」と呼ばれていた。それがいつの間にか「日本」と呼ばれるよう
になりました。もしかしたら、「倭国」と「日本」は別の国だったのかも知れません。



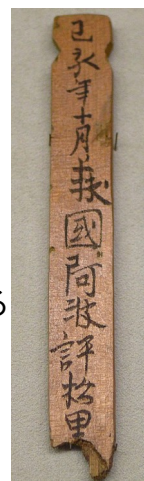
九州が「倭国」で、近畿が「日本国」だっ
たのかも知れません。

実際、中国の古い書物 「旧唐書」には、
倭国伝と日本国伝が両方載っていて、別の国
として書かれています。

「解説・資料編」

解説：遠国（おんごく、えんごく）とは、律令国の等級区分の一つである。古代日本の律
令制の下において、地方行政区画の一環として、畿内からの距離によって国を分けた。そ
の結果、「遠い位置にある国」が遠国とされた。出典: ウィキペディア

解説：令制国の成立は、昭和 42 年（1967 年）12 月、藤原京の北面外濠から「己亥（つちのとい、きどのいのしし、きがいに）年十月上埭国阿波評松里□」（己亥年は西暦 699 年）と書かれた木簡「上埭国（現千葉県）阿波評（安房地方）の松里とある。よみ：かずさのくに あはのこほり まつのさと：右図」が掘り出され郡評論争に決着が付けられたとともに、『日本書紀』にある大化の改新の諸政策は後世の潤色であることが判明しており、多くの令制国が確実に成立したと言えるのは、大宝元年（701 年）に制定された大宝律令からである
出典: ウィキペディア



解説：『旧唐書くとうじょ』には、
読み下し文（部分）

- ・倭国伝には次のようにあります。「注：倭国はいにしえの倭奴国のことである。」
- ・また日本国伝には次のようにあります。「日本国は倭国の別種である。」
「日本は古くは小国だったが、倭国の地を併合した。・・・とあります。
さらに、彼らは「我が国の国境は東西南北、それぞれ数千里あって西や南の境はみな大海に接している。東や北の境は大きな山があってそれを境としている。山の向こうは毛人の国である。」と言っている。・・・とあります。

注：倭国はいにしえの倭奴国のことである。

「読み：倭・・・ワ(呉)(漢)wo 倭・・・イ(呉)(漢)wei」

注：九州志賀島出土の「漢委奴国王印（かんのいどこくおうのいん）があります」

読み方：宗主国＋国名＋官号 → 漢＋委奴国＋王

読み：委・・・イ(呉)(漢) 奴・・・ド(漢)ヌ(呉)

2019.2.4 BS-TBS につぼん！歴史鑑定 福岡市博物館 米倉秀紀

解説：『旧唐書くとうじょ』倭国伝・日本国伝に、倭国は「貞観 22 年（648）の上表」が最後になり、日本国は、「長安 3 年（703）の粟田真人が来朝して国の特産物を献上した」事が、朝貢の最初になっていますので、648 年～703 年の間に、国の盟主が交替したと考える事ができます。701 年には、大宝律令が完成し、国の行政区域も評から郡へ変更され、国郡里制が成立した。事が読み取れます。

4. 魏志倭人伝という書物

倭人 邪馬台国 卑弥呼 は、古代史に興味ない人にも知られている程ですが、どれも魏志倭人伝に登場する言葉です。教科書には、魏志倭人伝と載っていますが、これは俗称で、「三国志 魏書第 30 巻 烏丸 鮮卑 東夷伝 倭人の条というのが正式です。

そこに 邪馬台国の女王卑弥呼が、魏の国に貢物して、お返しに親魏倭王という称号と金印をもらった。ということが書いてあります。3 世紀前半の中国は、魏・呉・蜀の 3 つの国に分かれていて、倭国は魏と付き合っていた。



日本の中で最も有名な古代都市、邪馬台国は未だにどこにあるのかわかっていません。有力なのは、近畿説と北九州説ですが、それ以外に四国説や沖縄説など日本中に候補地が広がっています。

もともとは、邪馬台国は、大和の国で間違い無しといわれていましたが、江戸時代の有名な学者新井白石が「九州にも山門やまとあり！」といい出してそれ以来論争が続いています。



1940年代には、宮崎康平氏が「まぼろしの邪馬台国」1970年代には、古田武彦氏が「邪馬台国はなかった」を出版して空前の邪馬台国ブームが起こりました。みんな邪馬台国を探したのですが結局はわからないままとされています。

邪馬台国がわからない原因は、日本の歴史書に全く姿を現さないことです。

では 日本の歴史書には、日本のことがどう書かれているのでしょうか。

古事記と日本書紀は、700年代はじめにできた書物ですが、なぜ同時期に2つの書物を作ったのか？、今でもわかっていません。

どちらも 神話時代～ヤマト朝廷初期の天皇家の歴史を描いています。

5. 天皇家の苗字

ところで天皇家は、日本で唯一苗字を持たない一族です。でも最初からなかったとは考えられません。いったい天皇家の苗字は何だったのでしょうか。

古事記によると最初の神様は、天之御中主神（あめのみなかぬしのかみ）、伊勢神宮に奉られている始祖神は、天照大神（あまてらすおおみかみ）、随の国に遣隋使を派遣したのが、阿每多利思北孤（あめのたりしほこ）で、初期の天皇家では、あま（あめ）を名乗る人が多くみられます。もしかしたら天皇家の苗字は、あま（あめ）だったかも知れません。

もともと苗字は、地名を名乗るのが普通で、清水の次郎長は、清水村の次郎長さんで、室町幕府をひらいた足利尊氏は、足利地方の尊氏さんとなります。もし天皇家苗字が「あま」だったとしたら、その故郷は「あまくに」という事になると考えられます。

そう言えば天照大神（あまてらすおおみかみ）の住む場所は、高天原（たかまがはら）でした。「天」と言う言葉は美称で、実際は「海部あま」と考えられ、天皇家の故郷は海に近い「海峡国家」だったのではないかと考えられます。そこを守る氏神様（その土地に住む人達を護っている神様）が、天神様です。菅原道真公（すがわらみちざねこう）を奉るようになってからは、学問の神様となりましたが、それ以前は「天国あまくに」を護る神様だったと考えられます。天皇家は、唯一無二の一家になったので苗字がなくなったのです。

解説：本来、天神とは国津神に対する天津神のことであり特定の神の名ではなかった。

天津神・国津神（あまつかみ・くにつかみ）は、日本神話に登場する神の分類である。

大国主など、天孫降臨以前からこの国土を治めていたとされる土着の神（地神）を「国津神」、天照大神などがいる高天原の神を「天津神」という。

出典: フリー百科事典ウィキペディア

6. 伊勢神宮の正式名称

天照大神（あまてらすおおみかみ）は、伊勢神宮に奉られています。
伊勢神宮というのは俗称で、「神宮」が正式名称です。明治になってから明治神宮や平安神宮など多くの神宮ができて、それらと区別するために「伊勢神宮」といいますが、それまで明治以前は、神宮といえば「伊勢神宮」しかありませんでした。天皇家と同じ唯一無二（オンリーワン）の存在だったのです。だから今でも「神宮」が正式名称なのです。

ところで天照大神（あまてらすおおみかみ）は、どうして始祖神になったのでしょうか。日本のアダムとイブは、伊弉諾神（いざなぎのみこと）伊邪那岐命（いざなみのみこと）で、天照大神（あまてらすおおみかみ）はその子供で、三貴神（天照大神、月読命つくよみのみこと、須佐之男命すさのおのみこと、）の一人として、高天原を治めていました。その孫が、天孫降臨した瓊瓊杵尊（ににぎのみこと）です。その息子が浦島太郎のモデルとなった山彦（山の神）で、その孫が初代の天皇となった神武天皇です。天照大神（あまてらすおおみかみ）は神武天皇にとっては偉大なご先祖様だったのです。実は魏志倭人伝に登場する卑弥呼は天照大神だったという（安本美典氏）説があります。確かに共通点は多い（女帝、弟がいる、いなくなったら世が乱れた・・・など）です。

しかし、一つだけ困った事実があります。日本書紀の中で唯一天皇でもないのに帝紀（ていき：天皇あるいは皇位継承を中心とする古代の伝承または史書）をたてられている人物がいます。それは15代応神天皇の母である神功皇后（じんぐうこうごう）です。その神功皇后の記録の中に卑弥呼と云う名前を削った倭人伝の文章がそのままコピー＆ペーストされています。

つまり日本書紀を書いた人物は、確実に魏志倭人伝を読んでいる事になります。もし天照大神と卑弥呼が同一人物だったなら天照大神の実績として書けばいいし、天照大神と卑弥呼が同一人物なら卑弥呼という名前を隠す必要もないと思われます。つまり中国の歴史書に出てくる卑弥呼が誰なのか当時の日本人にはわからなかったという事になります。（もしくは、違う王朝の人物だったために隠した可能性もあります。）

「解説・資料編」

解説：「古事記・日本書紀」神話の中で「イザナギとイザナミ」の国産み神話の島々は瀬戸内海を含む日本海側の西日本エリア（佐渡島含む）となっています。

つまり「古事記・日本書紀」はこの西日本エリアの出来事であり、この時点での王権（王朝）の勢力範囲と考えると現実的です。
だから日本書紀の国産みの島々も時代で変化していると思われます。

実は、神話の中で天降(下)りは三回（新羅、出雲、筑紫）ありますが、三回ともこのエリア内です。高天原から天降る際に中継地なしに直接に舟で行けると考えると「朝鮮半島南部・壱岐・対馬」のどこかもしくはこの領域が、高天原（アマ国）かもしれません。アマ国から下るからアマ下りです。ちなみに壱岐には天ヶ原（あまがはら）海水浴場があります。

『古事記』、『日本書紀』を国産み順に比較したものである。

古事記	日本書紀					
	本文	一書第1	一書第2	一書第3	一書第4	一書第5
淡道之穂之狭別島	淡路洲	大日本豊秋津洲	淡路洲・淡洲	淡路洲	淡路洲	淡路洲
伊豫之二名島	大日本豊秋津洲	淡路洲	大日本豊秋津洲	大日本豊秋津洲	大日本豊秋津洲	大日本豊秋津洲
隠伎之三子島	伊豫二名洲	伊豫二名洲	伊豫洲	伊豫二名洲	伊豫二名洲	淡洲
筑紫島	筑紫洲	筑紫洲	筑紫洲	億岐洲	筑紫洲	伊豫二名洲
伊岐島	億岐洲・佐度洲	億岐三子洲	億岐洲・佐度洲	佐度洲	吉備子洲	億岐三子洲
津島	越洲	佐度洲	越洲	筑紫洲	億岐洲・佐度洲	佐度洲
佐度島	大洲	越洲	大洲	壹岐洲	越洲	筑紫洲
大倭豊秋津島	吉備子洲	吉備子洲	子洲	對馬洲		吉備子洲
吉備兒島						大洲
小豆島						
大島						
女島						
知阿島						
兩兒島						

解説：国産み神話

上図は、イザナギ、イザナミが生んだ大八州（島）おおやしまの国とされます。古事記は、本文のみですが、日本書紀には、本文の他一書第1～一書第5までの説があります。大八州の国といっても、一書第4は7州、一書第5は9州となっています。この表の中に作った主体を見たのが通説です。つまり大日本豊秋津州（大和）が中心となって作ってきたと考えています。

しかしこれらは作った主体は外にあって、8つの子分の国（州）を作ったと考ええると見え方がだいぶ違ってきます。出雲王朝は隠岐から始まって大国（州）に移ったと考えられます。また九州の王朝は、壹岐・對馬を中心にして始まったと考えられます。

表の古事記を見ますと大国（大州）がありません。これは出雲時代の国産み神話と考えられます。また日本書紀の本文から一書第5の中で、大国（大州）がないのは、出雲時代の国産み神話であり、壹岐州、對馬州がないのは、九州王朝時代の国産み神話であり、大国（大州）と壹岐州、對馬州がない（一書第1）のは、この3国が中心の国産み神話と考えられます。王権は、時代とともに変化（推移）していると考えられます。

解説：『魏志倭人伝』

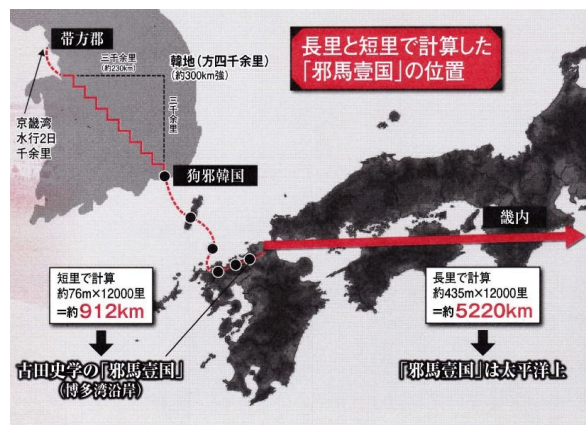
西晋の陳寿により3世紀末（280年（呉の滅亡）-297年（陳寿の没年）の間）に書かれ、陳寿の死後、中国では正史として重んじられた。

読み下し文（部分）

・倭人は帯方の東南大海の中にあり、山島に依りて國邑をなす。旧百余國。漢の時朝見する者あり、今、使譯通ずる所三十國。（略）南、邪馬壹國に至る、女王の都する所、水行十日・陸行一月。（略）郡より女王國に至る、萬二千余里。

解説：原文に「到其北岸狗邪韓國七千餘里」とあります。女王國まで、残り五千余里ですので、魏志倭人伝をそのまま素直に読めば北九州（博多）あたりまでしか行けない計算になると思います。

解説：『魏志倭人伝』の「邪馬壹國に至る、女王の都する所」と『後漢書東夷伝』の「その大倭王は邪馬臺国に居る。」について、邪馬壹國はエリア（例えば東京都）であり邪馬臺国はポイント（例えば皇居）を指すものと考えられます。さらに『魏志倭人伝』のころは、天子を指す言葉として「臺」を使用しており、天子に合うことは「臺に詣でる」とあります。卑字を使っている東夷伝倭人の条に天子を指す「臺」を国名に使うことは到底考えられません。なお国名の「邪馬壹國」は『魏志倭人伝』だけで使用されています。現在残っている版本全てが、「邪馬壹國」となっているとのこと。



7. 古代の人は長生きか

初代の神武天皇は、137歳まで生きたと古事記に書かれています。

とんでもない長寿だと思います。

初期の頃は、100歳以上生きた人は珍しくありません。

1代	神武天皇	137歳	10代	崇神天皇	168歳
6代	孝安天皇	123歳	11代	垂仁天皇	153歳
7代	孝霊天皇	106歳	12代	景行天皇	137歳
			15代	応神天皇	130歳

とても実年齢とは思えません。その理由として、「朝廷の歴史を古く見せるために年齢を創作した。」と云われていますが、どうも不思議です。

歴史を古く見せるためなら、崇神天皇 168歳 もリアルではないのだから 500歳とか1000歳とか書いても良いはずです。

ところが最長でも崇神天皇の168歳です。何か他に理由があるのでしょうか。

仮設があります。それは、「2倍年暦」という考え方です。

かつての日本（倭）は、今の半年で1年と数える暦を使っていたというものです。

その痕跡は、今も残っていて、例えば

①「大晦日（12月31日）全国の神社で行われている「大祓おおはらえ」1年間の罪と穢（けがれ）を祓う行事があります。

実はこの「大祓おおはらえ」の行事は6月30日にも行われています。

②日頃のご挨拶も、盆と暮の2回しています。

もし「2倍年暦」を使っていたとしたら最も長く生きた崇神天皇の168歳も84歳となって長寿としておかしくない年齢になります。

また聖書によりますと、アダムは930歳、ノアの方舟で有名なノアは950歳まで生きたといえます。ありえない長寿と云えますが、これも月の満ち欠けの28日で1歳と考える暦を使っていたと考えると今の70歳代になります。（いわゆる12倍年暦）

「こよみを制した者が王になる！」そんな格言があるように、むかしの王様はみんな暦を自分のものにしようとしていたといわれています。

「解説・資料編」

解説：大祓詞・大祓式（おおはらえしき）とは：毎年旧暦の六月と十二月の晦日（みそか）に御所の朱雀門（すざくもん）で行われた「大祓式」で皇族以下百官に宣下した祝詞が「大祓詞（延喜式〔927年〕）」です。（中臣祭文なかとみのさいもん、中臣祓なかとみのはらへとも言われます）

祓物（はらえつもの）を出して、祓戸の神の神威によって罪穢（つみけがれ）を解除（げじょ）する儀式であり、半年毎に恒例のものとしておこなわれるので「二季の祓にきのはらえ」と称します。大祓式で唱えられる祝詞が「大祓詞」（おおはらえのことば）です。

大祓は六月と十二月の末日に半年間の罪や穢（けが）れを祓（はら）うもので、イザナギノ命の「禊祓みそぎはらえ」が原型です。

大祓詞を奏上して、身体や心（精神）に滞（とどこお）った「汚穢（おえ）」を、ハラエとミソギでぬぐい去ります。「ハラエ」は、大麻（おおぬさ）を用いて祓い、「ミソギ」は水で身体を洗います。

大祓詞は大まかに、天皇の命により祓の神々に、罪、災い、汚穢（おえ）を移し、海原に出て流し捨て去る、という内容です。

「これは天皇の命で実行したために、身に付いた罪、災い、汚穢（おえ）を祓うことで、天皇が（天皇のために働いた）家来たちのために行う儀式のことです。」

送り仮名として使われている漢字は万葉仮名で、約900字の漢字で成り立っています。

「祓」の行事は神話にも語られており、もっと以前からおこなわれていたが、大祓詞の成立は平安期以前といわれています。

大きく二段に分かれていて、前段は豊葦原瑞穂国（とよあしはらのみずほのくに）、つまり日本国の成り立ちが語られ（いわゆる天孫降臨説話が語られています。）、後段では

「祓」をおこなうと罪穢がどのように消滅するかが語られています。

文体は「宣命体」です。天皇が大衆に降ろした命令ということです。

宣命（せんみょう）とは、天皇の命令を漢字だけの和文体で記した文書です。そしてその文体を宣命体（-たい）といい、その表記法を宣命書（-がき）、また宣命を読み上げる使者を宣命使（-し）、宣命を記す紙を宣命紙（-し）といいます。

かつて大祓詞は大祓式の参列者に向けて読まれたものでしたが、今日では神に向け奏上するようになりました。

解説：二倍年暦」について

『魏志倭人伝』の伝えられる写本の中には、「五世紀」南朝「劉宋」の史官であった「斐松之」という人物が他の史書を参考にして「注」をつけたものがあります。その中に『魏略』という書からの引用があり、「倭人、春耕秋収を記して年紀となす」という文章が書かれてあります。これについては「年紀」が「年数」を意味するものであり、「春耕」から「秋収まで」を計ってそれを一年としているという意味と考えられます。

資料：古代の天皇の寿命表 古事記（日本書紀） ○80才以上

○	1	神武天皇	137(127)
○	2	綏靖天皇	45(84)
	3	安寧天皇	49(57)
	4	懿徳天皇	45(77)
○	5	孝昭天皇	93(113)
○	6	孝安天皇	123(137)
○	7	孝霊天皇	106(128)
○	8	孝元天皇	57(116)
○	9	開化天皇	63(111)
○	10	崇神天皇	168(120)
○	11	垂仁天皇	153(140)
○	12	景行天皇	137(106)
○	13	成務天皇	95(107)
	14	仲哀天皇	52(52)
○	15	応神天皇	130(110)
○	16	仁徳天皇	83(110)

解説：「古代人の寿命」（ここでいう30歳は、15歳以上生存した人間の寿命です。）

縄文人の場合は、30才くらいと考えられています。これは、貝塚から発掘される骨から確定できるといわれます。しかし、弥生時代の人骨は発掘されること自体大変少なく、弥生人の骨は土に帰ってしまうといわれます。縄文人は、貝塚の近くに骨を埋葬しました。カルシウム分の多い土に埋葬された骨は、土に帰らず残るといわれます。

一方、弥生時代は稲作が始まっています。貝塚のようにカルシウム分の多い土には埋葬されなかったため、弥生人の骨は土に帰ってしまったのです。佐賀県の吉野ヶ里遺跡は有名ですが、発掘された人骨によると、弥生人は渡来系らしい特徴を備えているといわれます。縄文人に比べると背が高く、平均寿命は30～40歳ぐらい。遺物には紐のついた毛髪もあり、髪を結っていたこともわかります。

15歳以上に達した者の平均死亡年齢の時代変遷は、人口問題研究家の小林和正氏による

縄文時代：男31.1歳／女31.3歳	弥生時代：男30.0歳／女29.2歳
古墳時代：男30.5歳／女34.5歳	室町時代：男35.8歳／女36.7歳
江戸時代：男43.9歳／女40.9歳	（古人骨より推定）

1891～98 年調査：男 55.7 歳／女 57.1 歳

1965～66 年調査：男 70.3 歳／女 75.0 歳

8. なぜ神無月に神様がなくなるのか？。

日本では、明治になるまで、月の満ち欠けを基準にした太陰暦を使っていました。だから 1 ヶ月は 28 日となります。12 ヶ月で 336 日で、現在のカレンダーよりも 365 日－336 日＝29 日 足りなくなります。そこで閏年ならぬ閏月を設けて、1 年を 12 ヶ月＋閏月＝13 ヶ月で過ごしていました。

順に	1 月（睦月むつき）	2 月（如月きさらぎ）	3 月（弥生やよい）
	4 月（卯月うづき）	5 月（皐月さつき）	6 月（水無月みなづき）
	7 月（文月ふみづき）	8 月（葉月はづき）	9 月（長月ながつき）
	10 月（神無月かなづき）	11 月（霜月しもつき）	12 月（師走しわす）



10 月（神無月かなづき）の由来は、年に 1 回神様が出雲に出かけてしまって神様がなくなる。それで神無月です。出雲では神様が集まって来るので、10 月を神在月（かみありつき）と言います。

どうして神様はみんな出雲に集まるのでしょうか。天照大神がいる伊勢に集まれば良いのではないかと思います。どうやらその昔出雲が日本の中心だったのではないか。神話の中に国譲りという話があります。高天原にいた天照大神が出雲の神だった大国主命に対して、あなたの国を譲れと命令してその後天孫降臨した瓊瓊杵尊（ににぎのみこと）が支配した、という話です。

つまりそれ以前は出雲が国の支配者だったが、征服されたという事になります。大国主命は大きな社（やしろ）、今の出雲大社を造ることを条件として国を譲り黄泉の国の王として今もそこで奉られています。

黄泉の国とは死の国のことで、黄泉の国から帰ってくることを「よみがえる」といいます。そう云えば出雲大社だけ拝礼の儀式が違います。ほとんどの神社は「二礼二拍手一礼」といって拍手は 2 回ですが、出雲大社では拍手は 4 回で、「二礼拍四手一礼」となっています。「四」というのは「死」を連想させます。

平安時代の数え歌に「雲太うんた 和仁わに 京三きょうさん」というのがあって、



雲太うんた



和仁わに



京三きょうさん

雲太は出雲大社、和仁は大和の東大寺大仏殿、京三は京都の大極殿 のことで大きな建物の順番を表しています。大極殿とは天皇の住まいのようなもので王様の屋敷より大きな建物を滅ぼした国の王のために建てる事は、ほかの国では考えられないことです。ところが日本では、この考えられないことが普通に行われています。

9. 怨霊の祟りを恐れた日本人



出雲大社は現在24メートルの高さですが、その昔は倍の48メートルだった事が記録に残っていました。

誰も信じていなかったのですが、巨大な柱の跡が発掘されました。

今では間違いないとされています。出雲は後の大和朝廷に征服された国といわれていますが。なぜ征服された王のためにそんな巨大なものを建てたのでしょうか。それは怨霊が怖かったからだといえます。

古代の日本では「不遇のまま死んだ人は怨霊になって祟りをなす。」と信じられていました。それを恐れて手厚く祀る習慣が根付いたといわれています。

墓石も元々は死者がよみがえるのを防ぐためという説があります。

天照大神たちにとっては滅ぼした国の王は最も恐れた怨霊だったのではないのでしょうか。

出雲大社は、大国主命の魂を鎮めるために建てられた一大モニュメントなのです。

昔の人は、地震も台風も流行病も怨霊の祟だと思っていたと考えられます。

例えば紫式部の書いた源氏物語は、光源氏が主人公の長編恋愛小説ですが、スポンサーは当時の最大権力者の藤原道長です。

光源氏にはモデルがいます。

当時左大臣まで上りつめた源高明（みなもとのたかあきら）です。

二人はライバル関係でした。最後は源高明は、失脚し不遇な中で死んでしまった。

物語の中では、光源氏が事々に藤原氏に勝利する。

そのため中には、藤原氏に近い紫式部が書いたとは思えないと疑問視する研究者もいるくらいです。でもこれも源氏の祟りを恐れた結果と考えればスッキリします。

藤原道長は源高明に対して「物語の中で存分に活躍させるからどうか祟らないでくれ」と祈ったのではないのでしょうか。源氏物語は「怨霊封じの書」だったのかも知れません。

ところで、源氏物語の作者は紫式部だといわれていますが紫式部は名前ではなく、彼女の本当の名前は誰も知りません。ここに日本人が持っている不思議があります。

解説：源高明（みなもとのたかあきら）は、平安時代の公卿。醍醐天皇の第10皇子。母は源周子。法名は覚念。官位は正二位・左大臣。京都右京四条に壮麗な豪邸を建設し、西宮左大臣と呼ばれた。一世源氏の尊貴な身分であり、学問に優れ朝儀に通じており、また実力者藤原師輔、その娘の中宮安子の後援も得て朝廷で重んじられた。師輔・安子の死後、藤原氏に忌まれて安和の変で失脚し、政界から退いた。

安和の変（あんなのへん）は、平安時代の969年（安和2年）に起きた藤原氏による他氏排斥事件。謀反の密告により左大臣源高明が失脚させられた。

10．銅鐸は出雲王朝の持っていた神宝だった？。

南船北馬説（室伏 志畔氏）というのがあります。交通手段に、長江下流の人が船を使い、北方騎馬民族は馬を使った。その違いで、南船系の倭人と北馬系の倭人を考えますと、日本というのは紀元前の5世紀から4世紀頃に長江下流にあった、呉や越の亡国の民が、呉越同舟して黒潮分流に乗って、韓半島や日本列島にやってきました。この人達が王権を作っていたと考えられます。古代王権は日本海側を流れたと言えます。

古田武彦氏はどこに王朝の起源を見たかという点で呉や越の王権ではなく、あとから天孫降臨で、侵攻してきた朝鮮半島経由の北馬系の倭人の王朝を九州王朝としました。その前には、南船系の倭人の王権があったということになります。日本の古代史は、東アジアの民族移動史の1コマであって、その基本矛盾というのは南船系の倭人と北馬系の倭人の抗争・興亡にある訳です。

王朝の交替史を、出雲王朝、九州王朝、近畿王朝という変遷の中で考えますと、銅鐸の消滅した3世紀が、いわゆる出雲王朝に替わり、九州王朝が列島の盟主になったと言えるのではないのでしょうか。

銅鐸について記紀は何も書いていません。なぜ書かないのかということもまた大きな意味があると思います。これは当然隠したという事になると思います。

九州王朝にとって最大の敵の持っていた神宝が銅鐸であったという事は、九州王朝の分派から出てくる皇統にとって（いわゆる皇室にとっては）どういう働きをしていたかという、それを潰しに行ったその役をしていたのが皇統だと考えられるからです。

皇室というのは、皇統一元史観で、我々は遠い昔より列島を支配していた。それも畿内でやっていたということになっていきました。それが銅鐸が別のところで出てきたという事は困った話になってくる訳です。それで一切書かない、説明しないことになったと考えられるのです。

また、記紀には、神代と人代が書かれています。神代は出雲神話が中心にあって、人代は神武東征からの皇室の歴史になってきて書紀では、持統天皇まで続いています。ということは人代は皇室に直接関係のある歴史で、それ以前の歴史は神代という事になっています。しかし歴史ではないとは言ってません。

今までは、神代はあるけれど論じないほうが良いとされてきました。代表的な人物は、江戸時代の山片 蟠桃（やまがた ばんとう）や戦後の津田左右吉などがおりました。

本当は皇室史の前に出雲王朝などが神話として語られていると解釈されます。つまり天皇前史が書かれていることになります。

解説：山片 蟠桃（やまがた ばんとう、延享5年/寛延元年（1748年） - 文政4年2月28日（1821年3月31日））は、江戸時代後期の商人であり学者。極めて唯物論的な立場を取り、天文、宗教、経済、歴史等を百科全書的に論じた『夢の代』は、無鬼論（無神論）の主張、地動説の支持、応神天皇以前の日本書紀の真実性の否定など先進的な持論を展開した点が特筆される。出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

解説：津田 左右吉（つだ そうきち、1873 年（明治 6 年）10 月 3 日 - 1961 年（昭和 36 年）12 月 4 日）は、20 世紀前半の日本の歴史学者・思想史家。『古事記』や『日本書紀』、特に神話関係の部分は後世の潤色が著しいとして文献批判を行った。

出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

さて、以前は銅鐸文化圏と銅剣・銅矛文化圏という説が有りましたが、1984 年と 1996 年に出雲の神庭荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡が見つかりました。神庭荒神谷遺跡では、今までの出土数を上回る、358 本の銅剣が見つかりました。しかし銅剣と言われていですがあれは銅矛と考えられます。加茂岩倉遺跡では、39 個の銅鐸が見つかりました。

このことは、明らかに出雲王朝があったとなる訳ですが、通説は、皇統一元史観です。でまだ正式には認められてはいません。銅鐸について言えば、39 個の銅鐸が見つかったという事は、近畿圏の前に出雲に銅鐸王国があったと考えられます。これは何を意味するのでしょうか。

ヤマタノオロチ退治で成敗されたヤマタノオロチ族（八雲族）の神宝だったと考えられます。さらに言えば、「八雲やくも立つ 出雲いづも八重垣やへがき 妻籠つまごみに八重垣作る その八重垣を」は、嘆きの歌ではないか。妻籠つまごみとは「手籠てごめ」ではないか。スサノオ軍の侵攻の際人民への凄惨な行為を象徴しているのではないか。ちょうど六月晦大祓（みなづきのつごもりのおおはらへ）の祝詞にある、国津罪の「母と子を犯せる罪」と同じではないのか。八重垣とは掟・法律の事で、法律が有るにもかかわらずこのような事が行われた事と考えられます。

（以下に、六月晦大祓祝詞の「国津罪（部分）」を示します。）

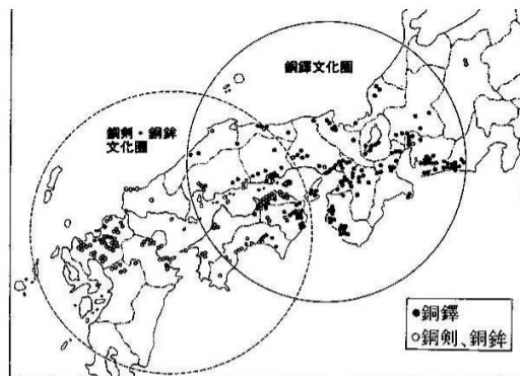
くにつつみと いきはだたち しにはだたち しろひと こくみ おのがははおかせるつみ
おのがこおかせるつみ

国津罪と 生膚断 死膚断 白人 胡久美 己が母犯罪 己が子犯罪

ははとことおかせるつみ ことははとおかせるつみ けものおかせるつみ

母と子と犯罪 子と母と犯罪 畜犯罪 （以下略）

ところが記紀文化というのは、そういう凄惨・恐ろしい事柄等を相聞歌（恋の歌）の方にずらして記述しています。だから日本人は昔から平和であって、そんな凄惨な・恐ろしい事など無いと思わせられてしまった。実際は、おぞましい光景は、記紀や大祓の祝詞に書かれているように侵略戦争の中では繰り返されたと考えられます。



銅鐸について言えば、出雲が侵略を受けたので、その銅鐸勢力が逃げていったのが、近畿地方であると考えられます。図の銅鐸文化圏というのは、出雲の銅鐸文化圏が敗れたあとの勢力図だったと考えられます。

侵略者は、どういう人達かというそれは銅剣・銅矛を持った人達という事になります。しかし神庭荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡で発見されたものは、銅剣・銅矛と言われているがあれはどちらも銅矛と考えられます。なぜならば、古来から出雲の神（大国主）は、八千矛神（やちほこのかみ）と言われてるからです。やはり矛と考えたほうが良いのではないのでしょうか。

出雲王朝があって侵略されて、人々は畿内に、東へ逃げた。敵は西からやってきたという事になります。神庭荒神谷の358本の銅剣の発見というのはどういう事かといいますと大国主の国譲りを示しているのではないのでしょうか。出雲が侵略を受けたので、その銅鐸勢力が逃げていったのが近畿地方で、図の銅鐸文化圏というのは後々の状況を示していると考えられます。しかし国譲りが終われば、畿内勢力も侵略の対象となって、最終的には、畿内の銅鐸文化圏も3世紀頃には、滅ぼされてしまった。

3世紀というのは、九州王朝支配の確立で、国譲りとは、出雲王朝から九州王朝への国譲りの事であって、大和朝廷への国譲りではありません。それを大和朝廷への国譲りのように見せているのが、記紀だといわれています。

大国主はなぜ大穴牟遲神（おおあなむぢ）と呼ばれているのでしょうか。八雲王朝はどこにあったのでしょうか。加茂岩倉遺跡の場所は、大原郡です。当時の地図や『出雲国風土記』によると9つに分かれています。

（意宇・島根・秋鹿・楯縫・出雲・神門・飯石・仁多・大原の各郡）。大原郡、ここが出雲の別名大国（州）といわれている所です。

出雲王朝は、出雲郡のスサノオから始まり、他の8郡を従えたのでヤマタノオロチ退治の話にしたと考えられます。たぶん越の国の八族ではないかと思われます。それは冒頭で述べましたように、呉や越の亡国の民が、呉越同舟して黒潮分流に乗って列島にやってきた人達ではないかと考えられます。丹後半島には、船がそのまま入れる船宿（写真：伊根町）があります。あれは越の地方の風習だといわれています。



須佐之男命の娘である須勢理毘売命（すせりびめのみこと）に婿に入ったのが、大国主（大穴牟遲神おおあなむぢ）ですが、実はスサノオを手引きしたのではないか。これは2つの勢力（征服・被征服）で、妥協が成立し始めているのではないのか。畿内での銅鐸文化の復活を象徴しているのではないのか。出雲系の復活ではないのかと考えます。

最初にヤマタノオロチ退治で侵略されたのは、八雲系の多氏だと考えられますが、その後国譲りによって出雲系の多氏が逃れていったのは畿内の三輪山の麓です。唐古・鍵遺跡（からこ・かぎいせき）は、八雲系の多氏と出雲系の多氏によって開かれ、後にニギハヤヒ系の物部氏も関わって、巻向遺跡に発展する形になってくる訳です。だからあれは天皇家によって作られた遺跡では無い事になります。

解説：多氏（おおし／おおうじ）は、「多」を氏の名とする氏族。

日本最古の皇別氏族とされる。「太」「大」「意富」「飯富」「於保」とも記され、九州と畿内に系譜を伝える。皇別氏族屈指の古族であり、神武天皇の子の神八井耳命の後裔とされる。出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

解説：皇別（こうべつ）とは、日本の皇室から、神武天皇以降に臣籍降下した分流・庶流の氏族を分類した用語。弘仁6年（815年）に朝廷が編纂した古代氏族の系譜集『新撰姓氏録』で、天津神・国津神の子孫を指す神別、朝鮮半島・中国大陆その他から渡来した人々の子孫を指す諸蕃とともに用いられた。

出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

解説：唐古・鍵遺跡（からこ・かぎいせき）は、奈良盆地中央部、標高約48メートル前後の沖積地、奈良県磯城郡（しきぐん）田原本町大字唐古及び大字鍵に立地する弥生時代の環濠集落遺跡。出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

解説：纏向遺跡（まきむくいせき）は、奈良県桜井市の三輪山の北西麓一帯にある、弥生時代末期から古墳時代前期にかけての集落遺跡。国の史跡に指定されている。

3世紀に始まる遺跡で、一帯は前方後円墳発祥の地とする研究者もいる。邪馬台国の中心地に比定する説があり、箸墓古墳などの6つの古墳が分布する。

出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

解説：ニギハヤヒ：『日本書紀』などの記述によれば、神武東征に先立ち、天照大神から十種の神宝を授かり天磐船に乗って河内国（大阪府交野市）の河上の地に天降り、その後大和国（奈良県）に移ったとされている。『先代旧事本紀』では、物部氏、穗積氏、尾張氏、海部氏、熊野国造らの祖神と伝える。出典: フリー百科事典『ウィキペディア』

そしてこれらを滅ぼしたのは、九州の勢力であった。九州勢力も最初の王というのは金印国家（漢委奴国王印）の委奴国です。通説では、まだ漢委奴国王印（かんのわのなのこくおういん）と呼んで倭国の属国の奴国としていますが、あれは委奴国（いぬこく）が貰ったとの解釈が正しいと考えられます。読み：委・・イ(呉)(漢) 奴・・ド(漢)ヌ(呉)

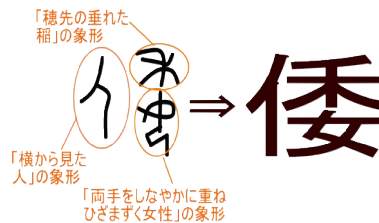
イヌというのは、現在「あいつはイヌにも劣る」といわれる様に侮蔑語にも使われていますが、これは最初に王国を作ったイヌ系の王族を卑しめる言葉と考えられます。なぜイヌが大事にされるかといいますと、中国の長江地方に、イヌを祖先と考える種族（シェ族）等があります。彼らの伝承によればイヌが尻尾に稲穂をつけて帰ってきたことで稲作がはじまったとしています。それで彼らは豊かになっていったと伝承されています。

金印の委奴国（いぬこく）、魏志倭人伝にも中に出てくる狗（いぬ）という漢字が使われている国が半島側（狗邪韓国）にも、九州側（狗奴国）にもあります。このイヌ系とは、南船系倭人の国の事を意味し、北九州から韓半島の南側にわたって倭国があったと示唆し

ているようです。また「書紀」にある隼人の吠声（はいせい）と神事・祭事における警蹕（けいひつ）先払いの音が、イヌ系の王族の儀礼をとどめていると考えられます。

解説：警蹕（けいひつ）：天皇や貴人の通行などのときに、声を立てて人々をかしこまらせ、先払いをすること。また、その声。「おお」「しし」「おし」「おしおし」などと言った。みさきばらい。みさきおい。けいひち。出典: goo 国語辞書

また倭国の倭という文字は、漢字学者によると稲が実って穂を垂れている姿で、実りの姿を表していると言われています。いわゆる倭国、倭人というのは、稲作国、稲作民を表しているのではないのでしょうか。決して卑語ではないと思われます。



最終的には、畿内の銅鐸文化圏も3世紀頃には、滅ぼされてしまった。3世紀というのは、九州王朝支配の確立で、国譲りとは、出雲王朝から九州王朝への国譲りの事であって、決して大和朝廷への国譲りではない。と述べました。

それでは、九州王朝は、いつできたのでしょうか。これは二中歴（年代歴）に書かれています。この中には継体から大化までの31の年号が書かれています。その最初の説明に、年始五百六十九年でそのうち無年号が39年あって、継体（517年）が始まったと書いてあります。

「 二中歴 年代暦 （付西暦年数）

年始五百六十九年内世九年無号不記支干其間結繩刻木以成政

継体 五元丁酉 五一七～五二一

（～略～）

大化 六乙未 六九五～七〇〇」

覧初要集云皇極天皇四年為大化元年

已上百八十四年々号世一代（不）記年号只人傳言 自大宝始立年号而已

・ ・ 以上部分掲載

最後の文は、「以上百八十四年、年号三十一代、年号は記さず。只、人の伝えて言う有り『大寶（大宝）より始めて年号を立つのみ』」と読み下すべきものと考えられます。つまり、年号は一八四年間三十一代にわたり使用継続してきたが（事情があり）今はそれを記さない、しかし、「大寶（大宝）」から始まったと言うのは言い伝えに過ぎない（以前からあったのだ）と言っているのです。

上記を見ると、始まって569年と書いてあります。継体が517年ですから、569年遡ると、517-569=▲52年（紀元前）なります。つまり紀元前52年が九州王朝が生まれたと考えることができます。まだこの時期に列島を支配できていなくとも、倭国としての金印国家（漢委奴国王印）の委奴国が、生まれてきたと考えられます。

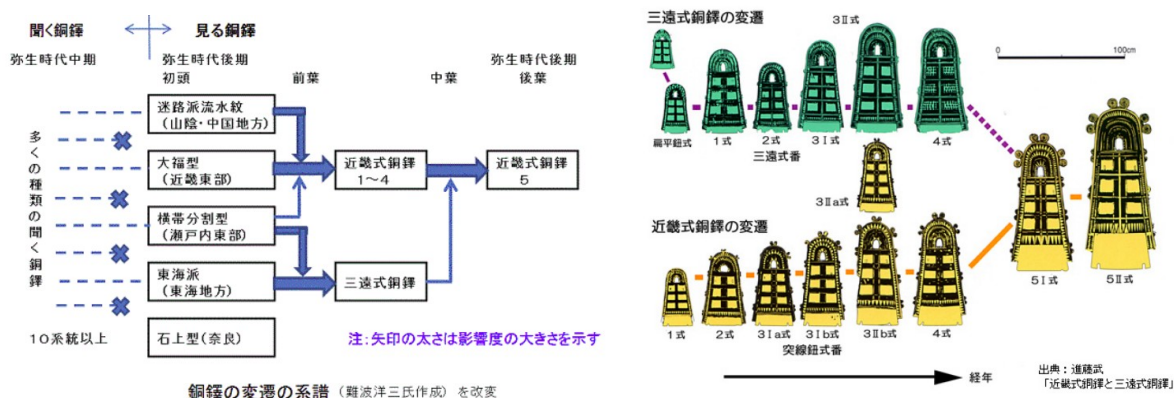
その頃は出雲王朝の時代に当たります。出雲王朝はいつ頃なのでしょう。銅鐸というのは紀元前2世紀～紀元後2世紀末頃までの約400年間が銅鐸時代です。これが出雲が中心の時代であったと考えられます。

銅鐸文化圏のところで、出雲が侵略を受けたので、その銅鐸勢力が逃げていったのが、近畿地方であると述べましたが、今度は考古学から見ると滋賀県守山市の伊勢遺跡（東西700m南北450m30ヘクタール）で環濠集落が見つかり、ここは縄文時代から室町時代にかけての複合遺跡であり、特に弥生時代後期の国内最大級の大型建物群で知られています。

さらに野洲川下流域の銅鐸・青銅器の特徴について見ると、野洲市の大岩山では、24個の銅鐸（どうたく）が出土しており、一ヶ所から見つかった銅鐸の数としては、島根県の加茂岩倉遺跡の39個に次いで多い数です。大岩山銅鐸には、日本最大の銅鐸が含まれています。また、栗東市の下鉤遺跡からは日本最小の銅鐸が見つかり、日本最大の銅鐸です。

そのほか近江南部での銅鐸、青銅器に関して特徴的なことは：

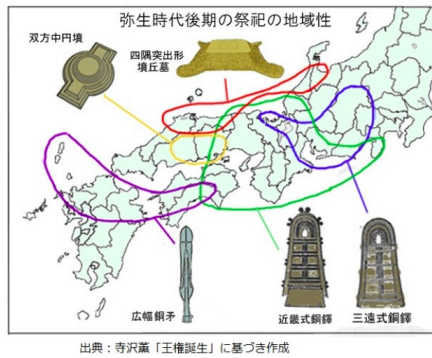
- ①もっとも古い銅鐸から新しい銅鐸まで 100～150 年にわたるいろいろな銅鐸が出ている
- ②ここで銅鐸の形式の統合が行われたと考えられる（下図）
- ③銅鐸祭祀の最後を飾って大岩山に多量に埋納された
- ④銅剣が出土する最東地点である・・・こと。



大岩山銅鐸弥生時代を特徴付ける金属器として、銅矛（どうほこ）、銅剣、銅戈（どうか）、銅鐸などがあります。地域と時代によって何を祭祀に用いていたかが異なりますが、野洲川下流域では、銅鐸の祭祀が弥生時代を通して行われていました。

明治14年（1881年）に野洲市小篠原の山の中で遊んでいた子供によって、14個の銅鐸が偶然見つかりました。また、昭和37年（1962年）、東海道新幹線の工事に関連して10個の銅鐸が見つかりました。平成8年（1996年）加茂岩倉遺跡で39個の銅鐸が出土するまでは、1ヶ所で発見された銅鐸の数としては、日本最多でした。また、総長135cmと、群を抜いて大きな銅鐸が見つかり、日本最大の銅鐸です。

銅鐸は入れ子にし、向きを揃えて、聖なる三上山の麓に埋納されており、弥生時代の幕引きの祭祀が行われたと考えられています。これらの銅鐸の特徴は、大福型、近畿式、三遠式などいろいろな形式のものがあること、また製作時期についても西暦50年ごろのものから西暦150～200年頃のものまでいろいろな時代の銅鐸があることです。



銅鐸表面に付けられている文様も、流水紋のものが1個ありました。バリエーティに富んだ銅鐸の種類から考えると、びわ湖周辺の拠点集落それぞれが保有し、祭祀を行っていた銅鐸を持ち寄って、埋納祭祀をおこなったと考えられています。

埋納場所も、明治と昭和に発見された場所が50mほど離れており、2回に分けて埋納されたと解釈されます。ただ、昭和に見つかった流水紋銅鐸1個はさらに50m離れた所から見つかっており、3回埋納説もあります。

銅鐸の用途ですが、主として弥生初期末から中期につくられた小～中型の銅鐸は音を鳴らして「聞く銅鐸」で、弥生後期の中～大型銅鐸は飾って「見る銅鐸」と言われています。すなわち銅鐸の用途は、中期と後期で大きく異なっていました。

この観点で大岩山の銅鐸を見ると、主に中～大型の「見る銅鐸」になります。大岩山に銅鐸を埋納した後は、鏡が祭祀に用いられるようになります。その後は、銅鐸は造られなくなり、大岩山の最大の銅鐸は、銅鐸の歴史では最新でかつ最後の銅鐸になります。



大岩山で見つかった銅鐸 【野洲市教委】



栗東市の下鉤遺跡からは、弥生時代中期の導水施設で高さ3.5cmの日本最小の銅鐸が見つっています。

日本で数十個の小銅鐸が見つっていますが、「聞く銅鐸」や「見る銅鐸」とは違う目的で用いられたようです。大きな銅鐸が山麓や集落のはずれに埋納されるのに対し、小銅鐸は集落から見るかるケースが多いようです。下鉤遺跡の小銅鐸は、聖なる水を得るための儀式で鈴のような使い方をしたのかも知れません。

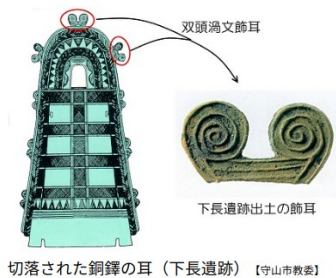
大岩山銅鐸の外にも、野洲川下流域と周辺で9個の銅鐸が見つっています。守山市の新庄では、銅鐸の歴史の中でも古い形式の新庄銅鐸が1個出土しています。江戸時代の記録では4個見つっていますが、現存するのは1個のみで倉敷市に保管されています。野洲川下流域に隣接する東近江市の山面で、新庄銅鐸に継ぐ古さの銅鐸が2点見ついています。9個の銅鐸は、全般に大岩山銅鐸よりも古い形式のものが多く、「聞く銅鐸」として使われていました。

大岩山で見ついている新しい世代の「見る銅鐸」と考え合わせると、近江地区では古くから「聞く銅鐸」の祭祀が行われ、弥生時代後期には「見る銅鐸」の祭祀に変容しながらも銅鐸を使った儀礼が続いていたことが判ります。

銅鐸は主に山陰、四国、近畿、東海などで使われていましたが、弥生中期（聞く銅鐸）～弥生後期（見る銅鐸）を通して使っていたのは近江を含む近畿だけです。

守山市の下長遺跡（しもながいせき）から銅鐸の飾耳が一点出土しています。下長遺跡は弥生遺時代後期に出現し、伊勢遺跡群の一つとして機能していました。

しかし、下長遺跡が最も栄えるのが古墳時代に入ってからで、豪族の居館が建ち、河川・湖上貿易の拠点となります。すなわち、銅鐸の祭祀の終焉に立会い、その後の鏡の祭祀を行った遺跡です。



そこから埋納したはずの銅鐸の飾り耳を切り落としたものが出土したのです。およそ 70cm クラスの銅鐸の飾耳だと推測されますが、対応する銅鐸は見つかっていません。

青銅器は非常に堅固で銅剣や銅矛として用いられるものでもあり、銅鐸も叩いて割れるものではありません。また、簡単に切り落とせるものでもありません。でも、高温に加熱して柔らかくしたら切ることができます。銅鐸祭祀の終焉にあたり、これまで大切にしてきたものを忘れないために隠し持ったのか、あるいはお守りとして残したのかも知れません。

銅鐸をつくる鋳型が多く見つかり、銅鐸の生産拠点と見なされていたのは、北九州と近畿の摂津、大和（唐古・鍵）などです。面白いことに多量の銅鐸が出土している、島根や淡路島、和歌山からは鋳型が出ていません。

一方、銅鐸の出土が極めて少ない北九州で銅鐸の鋳型が見つかっています。近江は銅鐸の出土も多く、銅鐸の鋳型や青銅器生産に関連するふいご部品が見つかります。銅鐸の鋳型としては、守山市の服部遺跡や栗東市の下鉤遺跡、野洲市の下々塚遺跡から見つかり、とくに下鉤遺跡からは青銅残滓（ざんし）が出ており、青銅器をつくっていたのは間違いないと考えられます。



興味深いのは、服部遺跡から大阪湾型銅戈の石製鋳型の一部が見つかることです。銅鐸の鋳型も出ていることから服部遺跡で青銅品を鋳造していた可能性は強く、ここで大阪湾型銅戈を作って近畿湾岸圏へ供給していたと考えられます。

唐古・鍵遺跡でも「見る銅鐸」の土製鋳型が多数見つかりますが、大岩山の近畿式銅鐸は地元で設計し製作していた可能性があります。

このように、野洲川下流域では弥生中期から後期にわたり銅鐸の祭祀を行っていて、銅鐸祭祀の終焉にあたり、大岩山に埋納して、弥生時代が終わっていること。さらに野洲川下流域には日本で最小の銅鐸と最大の銅鐸があることなどから、出雲から近畿圏への変遷を考えると、近畿式銅鐸はここで生産していた可能性があると考えられます。 出典：NPO 法人 守山弥生遺跡研究会 ホームページより部分掲載

「追記」：鉄鐸については、『先代旧事本紀』と『古語拾遺』が記す「天岩屋戸」条に、天岩屋戸に籠った天照大神を招きだすために、天目一箇神（あまのめひとつかみ）が種々の刀・斧・鐵鐸（古くは佐那伎〔さなぎ〕と言う）を作ったとあります。

この時の鉄鐸が鑄造か鍛造(たんそう)か、製法は分かりません。

そして天鈿売（あめのうずめ）が、鉄鐸を付けた矛を手にとって樽の上で踊ったとあることから、往時は矛や杖などの器具に音を出す飾りとして使用したと思われます。なお、鉄鐸は古墳時代まで見られその時代の鉄鐸は、扇形、あるいは台形に裁断した鉄板を丸めるように両端を合わせて鐸身としており、鍛造で作ったとみられます（早野浩二「古墳時代の鉄鐸について」研究紀要 第9号 2008年 Web）（上図）。)



諏訪大社上社所蔵、諏訪市教育委員会写真提供

また、藤森栄一著「銅鐸」学生社刊(s39.8.5 初版)によれば、いま国内の古社で鉄鐸を蔵するもの、諏訪神社上社、小野神社、上伊那郡小野村矢彦神社である。諏訪神社には、現在六口ずつ三組あり、形状・大きさは大同小異である。（左図）

社伝によると往古神使の巡回に使用した宝鐸で、室町時代には、これを打ちならして誓約の証とした記録がある。古来の神宝中でも、特別な位置を占めた重宝である。製作の時期については、資料及びそれ自体に記録がないのでわからないが、相当年代までさかのぼり売することは否定できない。

諏訪大明神画詞には、「大鈴ノゴトシ」とあり池原香釋（いけはらかわか）のみともの数には「さなぎの鈴」と記しており、神社では宝鈴とよんでいる。

古典にいう佐奈伎がこれにあたるのだろう。（以上 藤森栄一著「銅鐸」より引用。）

参考資料

- ・卑弥呼の謎(19721024) 安本美典（やすもとびてん） 講談社現代新書
- ・邪馬台国はなかった(19771010) 古田武彦（ふるたたけひこ）角川文庫
- ・風土記にいた卑弥呼(19880420) 古田武彦（ふるたたけひこ）朝日文庫
- ・逆説の日本史 1～4 (19980101) 井沢元彦（いざわもとひこ）小学館文庫
- ・倭国伝 (20100913:中国正史に描かれた日本)、藤堂明保・竹田晃・影山輝圀、株式会社講談社
- ・別冊宝島 2465 (20160627:古代史再検証邪馬台国とは何か)、瀧音能之、株式会社宝島社
- ・新訂古事記 現代語訳付 武田祐吉訳注 中村啓信補訂 角川ソフィア文庫
- ・日本書紀上下 全現代語訳 宇治谷孟（うじたにつとむ）、鈴木哲、株式会社講談社
- ・続日本紀 朝日新聞本（全十二巻佐伯有義、朝日新聞社、昭和 15）三・四を体系本・諸本で補訂
- ・その他ネット検索 （了）